

平成30年度

大学横断的かつ競技横断的統括組織

(日本版NCAA) 創設事業 (大学スポーツ振興の推進)

成果報告書

平成31年3月

新潟医療福祉大学

目次

1	事業の概要	・ ・ ・ ・ 2
1.1	事業の趣旨及び目的	・ ・ ・ ・ 2
1.2	事業の内容	・ ・ ・ ・ 2
2	スポーツ分野の統括業務の実施	・ ・ ・ ・ 5
2.1	新潟医療福祉大学におけるスポーツ分野の統括体制	・ ・ ・ ・ 5
2.2	本事業における追加業務	・ ・ ・ ・ 6
3	スポーツアドミニストレーターの配置	・ ・ ・ ・ 11
3.1	新潟医療福祉大学におけるスポーツアドミニストレーターの配置状況	・ ・ ・ ・ 11
3.2	本事業における追加業務	・ ・ ・ ・ 11
4	大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施	・ ・ ・ ・ 13
4.1	スポーツ教室の質のさらなる向上	・ ・ ・ ・ 13
4.2	スポーツ傷害予防フォーラムの実施	・ ・ ・ ・ 19
4.3	アルビレックスグループと連携した人材育成のさらなる推進	・ ・ ・ ・ 25
4.4	障害者スポーツのさらなる振興	・ ・ ・ ・ 30
5	まとめ	・ ・ ・ ・ 38
5.1	実施した事業	・ ・ ・ ・ 38
5.2	総括	・ ・ ・ ・ 41

1 事業の概要

1.1 事業の趣旨及び目的

本学は保健・医療・福祉・スポーツの総合大学として、対象者の QOL (Quality of Life) 向上を考え、QOL 向上の支援を実践する人材 (QOL サポーター) の育成を教育の基本理念としている。また、本学は地域のスポーツ振興や人材育成に寄与するためのスポーツ資源として、教員、運動部、スポーツ施設、健康・スポーツ分野を実践的に学ぶ学生等を保有している。

これまで本学は、健康科学部健康スポーツ学科と強化指定クラブを中心に、地域と大学が連携・協働・共創する場を作り、共に学び、成長、発展し、共に QOL を向上させることを目的として、既に地域へのスポーツ指導や障害者スポーツの振興、アスリートのキャリア支援についての実績を残している。

この取り組みをさらに日本版 NCAA 創設事業として推進し、他大学のモデルとなることにより日本の大学スポーツの発展に寄与することを目的として本事業を行った。

1.2 事業の内容

本事業では、以下の 3 項目について取り組みを行った。

①スポーツ分野の統括業務の実施

既に本学は 2016 年度に「スポーツ振興室」を大学事務局内に設置し、スポーツ憲章の策定、強化指定クラブの管理、学生・職員への試合結果の広報、スポーツ関連事業の新規企画・立案、学内外の関係者との調整役等の役割を担当している。

本事業において以下の 2 点を追加業務として行った。

(1) 本学スポーツのブランド力向上に向けた施策立案

これまで本学が行ってきた地域へのスポーツ指導、障害者スポーツの振興、アスリートのキャリア支援等について、個別に行われてきた情報発信体制を改善し、ブランド力の向上につながる施策を検討する。

(2) コンプライアンス遵守、安全対策

各強化指定クラブの部費の管理等コンプライアンス遵守の強化や傷害保険加入状況の管理などの安全対策についての推進方法を検討する。

②大学スポーツアドミニストレーターの配置

既に本学は 2016 年度に大学事務局スポーツ振興室に、2018 年度からは学校法人新潟総合学園スポーツ推進室に大学スポーツアドミニストレーターを配置している。

大学事務局スポーツ振興室では、スポーツ憲章の策定、強化指定クラブの管理、学生・職員への試合結果の広報、スポーツ関連事業の新規企画・立案、学内外の関係者との調整役等の役割を果たしている。

学校法人新潟総合学園スポーツ推進室では、プロスポーツクラブであるアルビレックスグループ等、主に学外の関係者との調整についてスポーツ振興室と連携して行う。

本事業において以下を追加業務として行った。

- (1) 本学スポーツのブランド力向上に向けた施策立案

「①スポーツ分野の統括業務の実施」と同様。

- (2) 大学外との連携強化策立案

学校法人新潟総合学園スポーツ推進室では、プロスポーツクラブであるアルビレックスグループ等、主に学外の関係者との調整についてスポーツ振興室と連携して行う。本事業ではさらなる学外との連携を強化するための体制を検討する。

③大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施

本学のスポーツの特色である、地域との連携、スポーツ科学とリハビリテーション科学の融合、障害者スポーツの取り組み、アルビレックスグループとの連携をさらに推進するために、今回以下の4事業を行った。

- (1) スポーツ教室の質のさらなる向上

既に本学では地域の子供を対象として、学生を中心にスポーツの指導を行っている。本事業では既存のスポーツ教室の課題を抽出し、改善に繋げてスポーツ教室の質向上を図る。

具体的には以下の教室を対象とする。

- i. 子どもの運動能力向上教室

対象：小学校1年生～6年生

日程：毎月第2・4土曜日

- ii. 陸上教室

対象：小学校4年生～6年生

日程：毎週日曜日

- (2) スポーツ傷害予防フォーラムの実施

本学の特色であるリハビリテーション科学とスポーツ科学を組み合わせ、地域のスポーツ団体を対象としたスポーツ傷害予防に関するフォーラムを開催する。

- (3) アルビレックスグループと連携した人材育成のさらなる推進

既に本学はプロクラブであるアルビレックスグループと連携し、インターンシップの実施やスポーツマネジメントの調査研究、経営者による講義、トレーニングマッチの実施、女子サッカー部員のアルビレックスレディースへの登録等の人材育成を行っている。

本事業ではアルビレックスグループとのさらなる連携による人材育成を推進する。

(4) 障害者スポーツのさらなる振興

既に本学では、障害者スポーツ振興の取り組みを行っている。全国でも数少ない義肢装具士の養成学科である義肢装具自立支援学科を設置しており、月に1回、四肢切断者を対象とした陸上教室を実施している。また、本学では全学生の必修科目である「スポーツ・健康」で車いすバスケットボールを全学生が経験し、障害者スポーツへの理解向上を図っている。さらにそこから車いすバスケットサークルが結成され、学生中心に学内での車いすバスケットボールの普及を行っている。

本事業では既存の取り組みの課題を抽出し、改善を図り、障害者スポーツのさらなる振興を目指す。

2 スポーツ分野の統括業務の実施

2.1 新潟医療福祉大学におけるスポーツ分野の統括体制

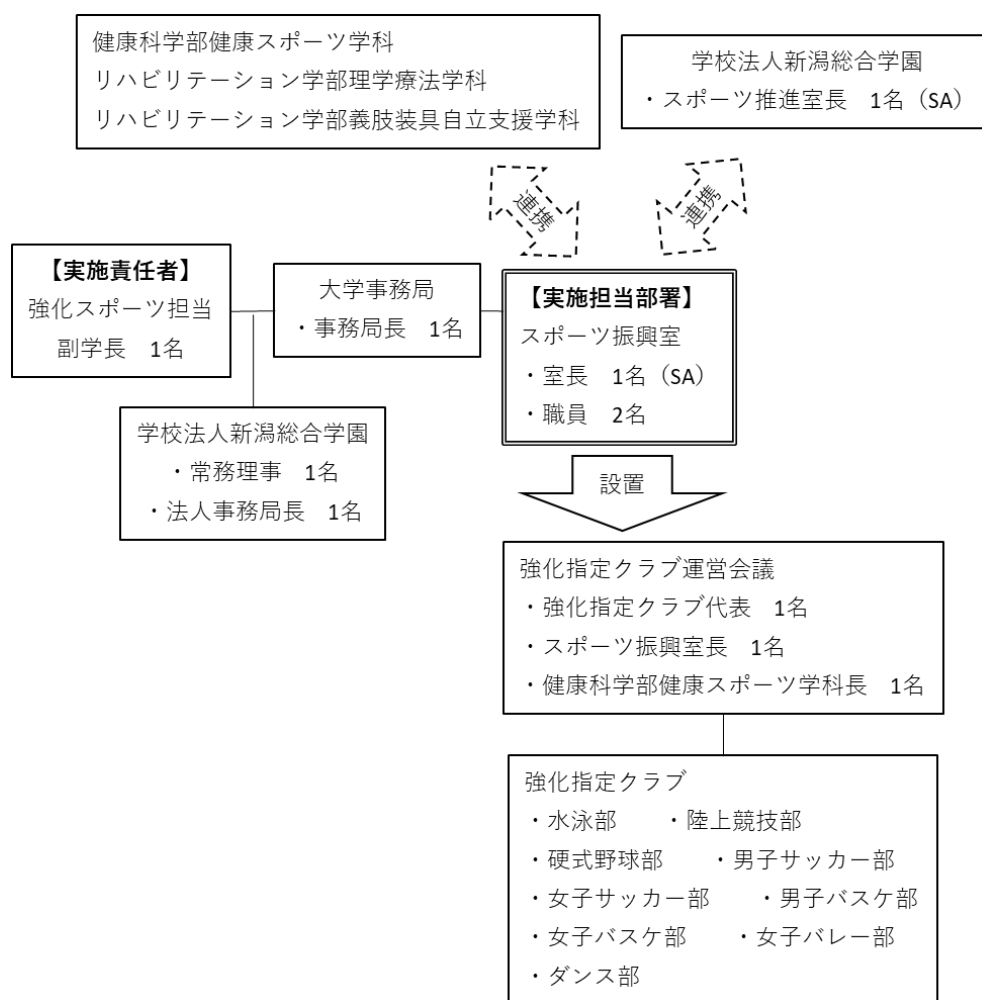
前述のように、既に本学は2016年度に「スポーツ振興室」を大学事務局内に設置し、スポーツ分野の統括業務に取り組んでいる。

2018年度のスポーツ分野の統括体制は下図の通りである。強化スポーツ担当副学長を責任者とし、大学事務局のスポーツ振興室が中心となって統括業務の実施を担当する。スポーツ振興室長をスポーツアドミニストレーターとして配置している。

強化指定クラブの運営は、スポーツ振興室が設置する強化指定クラブ運営会議を中心に行う。その他、学生・職員への試合結果の広報、スポーツ関連事業の新規企画・立案、学内外の関係者との調整役等をスポーツ振興室が担う。

学外関係者との調整に関しては室長をスポーツアドミニストレーターに配置した学校法人新潟総合学園スポーツ推進室と連携する。

その他、健康科学部健康スポーツ学科やリハビリテーション学部理学療法学科、義肢装具自立支援学科等、関連する組織と連携しスポーツ振興室が主体となって取り組んでいる。



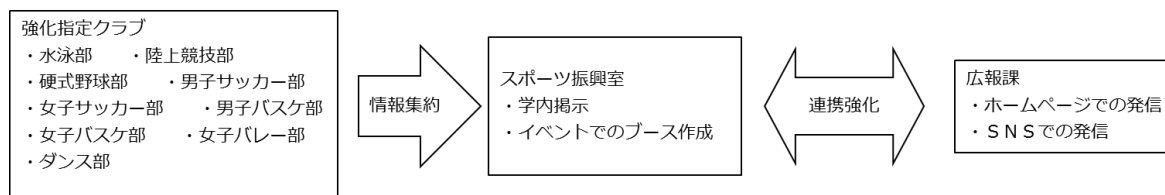
新潟医療福祉大学における2018年度スポーツ分野統括体制

2.2 本事業における追加業務

本事業において以下の2点を追加業務として行った。

(1) 本学スポーツのブランド力向上に向けた施策立案

本学スポーツのブランド力向上のために、下図のように情報集約体制と情報発信体制の強化を行った。強化指定クラブの試合日程や試合結果等、話題となる情報がスポーツ振興室に集まるように情報の共有を強化した。また、広報課との連携を強化し、集約した情報をホームページやSNSで発信を強化した。



情報集約体制と情報発信体制の強化

上記の体制の下、今年度においては以下の取組を実施した。

i. 昨年度から継続している取組

① 強化指定クラブおよび日本代表選手の大会情報の把握及び発信

前述のようにスポーツ振興室が強化指定クラブから大会に関する情報や選手の活躍等を時集約・把握を行い、広報課と連携することによって大学ホームページやSNS(主にTwitterおよびFacebook)による発信を行った。

[Twitter]

大会での実績紹介(事後)、大会出場情報(事前)、選手・卒業生の活躍情報を発信。その他、本学に関する情報がTwitter内で発信されている場合、有益な情報はリツイート機能を使用して拡散。

配信数: 67件 (2019年9月1日~2019年2月28日)

▶大会等での実績紹介



▶出場大会情報



▶選手活躍情報



[Facebook]

大会での実績および選手の活躍情報等を配信。

配信数：33件（2018年9月1日～2019年2月28日集計）

▶選手の活躍情報・大会等での実績紹介



ii. 今年度の新たな取組

① 学内掲示の充実（学内掲示板、学バス掲示）

強化指定クラブの試合日程や結果等に関する学内掲示を充実させ、強化指定クラブ選手ではない学生や職員・教員に対し大学スポーツに対する認識や理解の向上を図った。掲示は毎月一回を基準に貼り換えを行い、最新の情報や活動状況を掲載している。



学内掲示の状況

② イベントでの強化指定クラブブースでの学外発信

9月及び3月オープンキャンパスにおいて、強化指定クラブの紹介コーナーを設置し、強化指定クラブの実績等に関する情報発信を行った。



オープンキャンパスでの強化指定クラブ紹介コーナー

iii. 取組の評価

① 強化指定クラブおよび日本代表選手の大会情報の把握及び発信

積極的に Twitter や Facebook で情報発信することにより、SNS 上で強化指定クラブに関する情報を発信することができた。Twitter では期間内において、10RT 以上された投稿が 24 件（最大 85RT）となり、情報発信において成果を残した。

② 学内掲示の充実

学内掲示を充実させることにより、教職員や在学生在が強化指定クラブの情報に触れる機会が増え、強化指定クラブに対する学内からの関心が増加した。

③ イベントでの強化指定クラブブースでの学外発信

これまで、強化指定クラブ全体として情報を集約・発信する機会は限定されていたため、オープンキャンパス参加者全体に対して、本学のスポーツ推進についての理解を促し、魅力として感じてもらうことができた。また、強化指定クラブへの入部を考えている参加者に対して効果的な説明につながった。

iv. 今後の課題

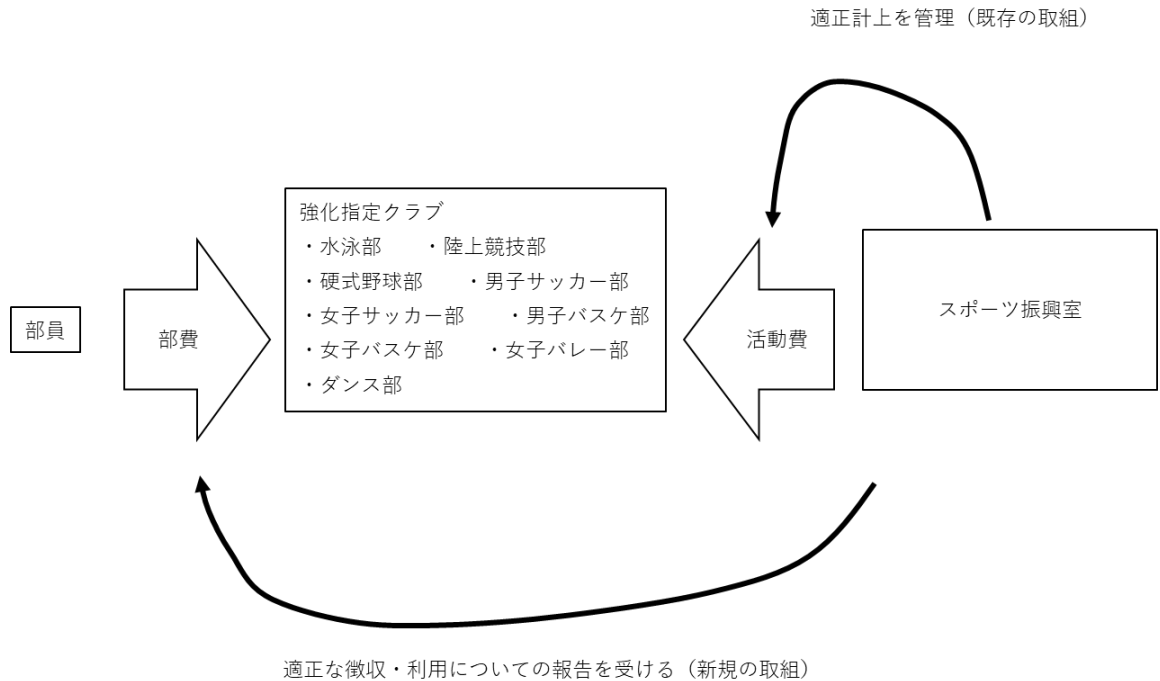
今回、情報集約・情報発信体制の整備によって強化指定クラブに関する情報発信を強化することができた。今後は本学強化指定クラブへのファン獲得のための施策を検討し、さらに地域から求められる存在へと取り組みを継続していく。

(2) コンプライアンス遵守、安全対策

コンプライアンス遵守の強化として、各強化指定クラブ経費の管理方法の強化を実施した。また、安全対策の強化として傷害保険加入状況の調査と施策の検討を行った。

i. 強化指定クラブ経費の管理方法の強化

これまで、本学が各部に支給を行っていた活動費については、経費の適正計上についてスポーツ振興室が管理を行っていた。本事業では、下図のようにさらに学生部員から各部で徴収している部費についても適正に徴収および経費計上がされているか、年度毎にスポーツ振興室に報告を行う体制に変更した。



各強化指定クラブ経費の管理体制の強化

また、強化指定クラブと学生部員及び保護者との信頼関係構築のため、各部が保護者宛に年度の決算書を郵送し、部員には①次年度のスケジュール、②次年度の部費、③次年度に予想される活動費、の案内を加えて郵送することにより、透明性の担保を確保する体制とした。

ii. 安全対策の強化

安全対策の強化について、施策立案のために、各部の傷害保険加入状況を調査した。

調査の結果、公益財団法人日本国際教育支援協会「学生教育研究災害傷害保険」については全学生が加入しており、本学の「学生総合保障制度」には強化指定クラブの学生の77.6%（464人／598人）が加入していることがわかった。

これは他大学の加入率と比較すると（保険会社からのヒアリング）、「学生教育研究災害傷害保険」は86.2%、「学生総合保障制度」と同種類の保険は20～30%程度の水準であり、本学は他大学よりも高い加入率となっている。

今後は、既存の「学生教育研究災害傷害保険」と「学生総合保障制度」をベースとして、妥当な補償範囲のモデルを検討し、学生の負担が大きくなるような保険料で上乗せ補償を充実させる、スポーツ安全保険への加入推進を進める、など安全対策の強化施策を検討していく。

iii. 今後の課題

コンプライアンスの分野は、経理や安全確保以外にも、ハラスメント、ドーピング、スポーツマンシップ等、幅広い取り組みが求められる。今後も、各分野現状の把握を行いながら改善を進め強化していく。

3 スポーツアドミニストレーターの配置

3.1 新潟医療福祉大学におけるスポーツアドミニストレーターの配置状況

前述のように、既に本学は2016年度に大学事務局スポーツ振興室に、2018年度からは学校法人新潟総合学園スポーツ推進室に大学スポーツアドミニストレーターを配置し、学内外の調整を行いながら、地域との連携、スポーツ科学とリハビリテーション科学の融合、障害者スポーツの取り組み、アルビレックスグループとの連携した人材育成に取り組んでいる。

大学事務局スポーツ振興室では、スポーツ憲章の策定、強化指定クラブの管理、学生・職員への試合結果の広報、スポーツ関連事業の新規企画・立案、学内外の関係者との調整役等の役割を果たしている。

学校法人新潟総合学園スポーツ推進室では、プロスポーツクラブであるアルビレックスグループ等、主に学外の関係者との調整についてスポーツ振興室と連携して行う。また、強化指定クラブの将来計画立案をスポーツ振興室と連携して行う。

大学スポーツアドミニストレーターとして本学が求めている基準は以下としている。

- i. 新潟医療福祉大学スポーツ憲章の趣旨を理解し、その推進に取り組むことができる者。
- ii. 大学教育制度について基本的な知識を持っている者。
- iii. 学内外のステークホルダーと連携を取りながら事業推進するコミュニケーション能力を備えたもの。

3.2 本事業における追加業務

本事業では以下を追加業務として行った。

- (1) 本学スポーツのブランド力向上に向けた施策立案
「2 スポーツ分野の統括業務の実施」と同様。

- (2) 大学外との連携強化策立案

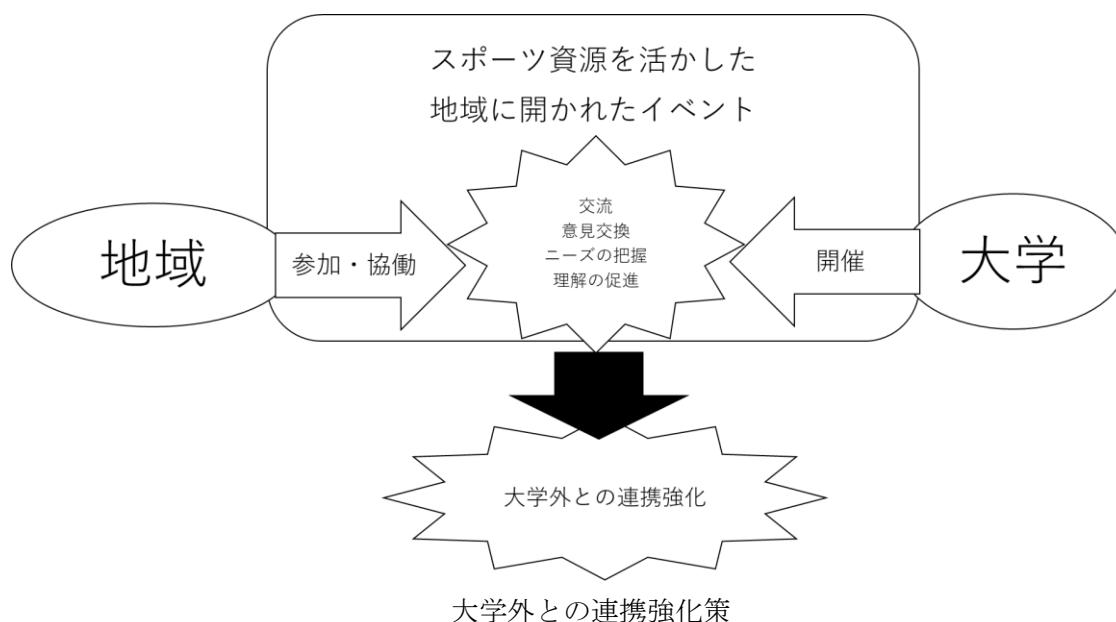
学校法人新潟総合学園スポーツ推進室では、プロスポーツクラブであるアルビレックスグループ等、主に学外の関係者との調整についてスポーツ振興室と連携して行っている。本事業ではさらなる学外との連携を強化するための体制を検討した。

新潟医療福祉大学は教育・研究・社会貢献活動を通して、新潟県内における健康及びスポーツの各分野・各競技のハブ的役割を担うことで、健康及びスポーツの学問領域を進化させ、地域と大学が連携・協働・共創する場を作り、共に学び、成長、発展し、共にQOLを向上させることを目的に取り組みを行っている。この目的を実現する上で、地域や行政、企業等の大学外との連携を強化していくことが重要である。

しかし、これまでの大学外との連携においては、本学が抱えるスポーツ資源が大学外に十分に伝えられていないこと、そして大学外が抱える課題と本学が抱える資源のマッチングの機会が不足していることにより、十分な連携を図ることができていたとは言い難かった。

この課題を解決する上で、本学が地域と関わる機会を促進し、その活動を通して双方向のコミュニケーションを図りながら地域のニーズを把握していくことが必要と考えられる。その具

体的方策の1つとして、後述する「大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施」における「スポーツ傷害予防フェスタ in NUHW」と「アスリートとSNS」のような地域に公開したイベントを開催することによって、下図のように本学の特色を地域に伝えるとともに、参加者との対話やアンケートを通じてニーズを把握していくことが考えられる。



本方策の有効性の確認として、今回の「スポーツ傷害予防フェスタ in NUHW」と「アスリートとSNS」において、アンケートを実施した。その結果、以下のような意見を頂いている。

- ・他の競技でも傷害予防のイベントをしてほしい。
- ・小学生に対して大学生からの指導をしてほしい。
- ・ミニバスチームへの学生のコーチ派遣してほしい。
- ・運動と食事のバランスに関するイベントをやってほしい。
- ・高齢者の膝や腰のトラブルに関するイベントをやってほしい。
- ・テーピングのやり方に関するイベントをやってほしい。
- ・スポーツ心理やメンタル的な内容に関するセミナーやってほしい。
- ・アマチュアスポーツに関する価値向上に関するセミナーをやってほしい。
- ・コーチングに関するセミナーをやってほしい。
- ・スポーツ栄養学的な内容に関するセミナーをやってほしい。
- ・スポーツと企業の関わり方（スポンサーなど）に関するセミナーをやってほしい。
- ・スポーツ部の運営に関するセミナーをやってほしい。

このように、地域からのニーズが明確に出てきているので、本方策は大学外との連携に関する課題解決策の1つとして有効であると考えられる。

今後、今回頂いたニーズを参考に継続的に地域と関わるイベントを開催していくことにより、大学外との連携強化を図っていく。

4 大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施

4.1 スポーツ教室の質のさらなる向上

本学が取り組んでいる地域の子供を対象とした2つのスポーツの指導教室について、課題を抽出し改善に繋げることによりスポーツ教室の質向上を図った。

(1) 子供の運動能力向上教室

i. 教室の概要

本教室は子どもの運動能力を洗練させることを目的に行われている。ただし、ここで意味する運動能力は「身体知」を意味する。そのため、体力テストで実施される運動能力（体力）とは異なる。身体を巧みに操ることができるか、対象物（ボールなど）を巧みに操ることができるなど、すべての運動の基礎的能力を洗練させることが目的とされている。言い換えれば、基本的運動形態の充実を目指し、子ども達がそれぞれの興味関心に基づいて、各スポーツを実施する際に困らない、あるいはよりスムーズに各スポーツを実施できるようにすることが目指されている。

本教室は月に2回土曜日に開催され、毎回20名程度の子ども達が集まり、本学の第2体育館を利用して行われている。

ii. 課題

現状を分析し、本教室の課題は以下の2つであると考えた。

- ① 参加者を増加させること（参加人数が増えることで実施できる運動が増えるため）
- ② 子どもの運動能力を向上させること

iii. 課題の解決方法

課題を解決させるためには本教室における「指導の充実」が必要であると考えられる。本教室における指導を充実させることによって、子どもの運動能力の向上へとつながり、それが口コミとして広がり、参加者を増加させる可能性を高めるからである。もちろん、指導を充実させるためには、指導力の質の向上はもとより、施設ならびに用具の充実などの環境的要因の改善も図られる必要がある。

そこで今回、指導者として活動する学生の指導力の質向上に力点をおいた。具体的には、本教室終了後に担当教員との振り返りの時間を設け、その日の指導の良かった点と改善点を話し合い、次の指導に生かそうと試みた。なお、本事業が開始される時期と学生が指導に携わった時期はほぼ同じであった。

iv. 実施状況

本教室を実施した日程は以下のとおりである。指導者として活動する学生の指導力の質向上のため、毎回の教室終了後に担当教員との振り返りの時間を設けた。

9月：8日（土）、22日（土）

10月：13日（土）

11月：10日（土）
12月：1日（土）、8日（土）
1月：12日（土）、26日（土）
2月：9日（土）、23日（土）
3月：9日（土）、16日（土）

振り返りでは、子どものまとめ方、動きのポイントの呈示方法、示範のしかた、練習メニューの計画方法について指導を行った。



教室の実施状況

v. 効果の評価

2018年12月と2019年3月に保護者ならびに子どもに対して満足度アンケートを実施した。結果は以下の通りである。なお、12月の回答者数は保護者12人、子ども15人、3月の回答者数は保護者6人、子ども15人である。アンケートは強制されるものではなく、任意で実施された。毎回20人弱の子どもの参加を考慮すると、アンケートの回収率は決して良いとはいえないが、今後の課題を浮き彫りにするためには不十分であるとはいえないと考えられる。

【入会してからの本教室への参加頻度】				
	月2回		月1回	
	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施
保護者	75%	100%	25%	0%
子ども	83%	100%	17%	0%

【施設の充実度】										
	大変満足		満足		ふつう		不満		大変不満	
	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施
保護者	50%	67%	50%	33%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
子ども	50%	20%	28%	47%	22%	33%	0%	0%	0%	0%

【用具の充実度】										
	大変満足		満足		ふつう		不満		大変不満	
	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施
保護者	33%	50%	42%	50%	25%	0%	0%	0%	0%	0%
子ども	56%	47%	28%	33%	17%	20%	0%	0%	0%	0%

【指導の充実度】										
	大変満足		満足		ふつう		不満		大変不満	
	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施
保護者	50%	60%	50%	40%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
子ども	50%	40%	28%	40%	17%	20%	6%	0%	0%	0%

【運動能力向上の実感度】										
	大変満足		満足		ふつう		不満		大変不満	
	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施
保護者	33%	17%	25%	67%	42%	17%	0%	0%	0%	0%
子ども	33%	20%	39%	33%	28%	40%	0%	7%	0%	0%

【楽しさ】										
	大変満足		満足		ふつう		不満		大変不満	
	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施
保護者	42%	67%	50%	33%	8%	0%	0%	0%	0%	0%
子ども	61%	53%	17%	40%	22%	7%	0%	0%	0%	0%

【総合満足度】										
	大変満足		満足		ふつう		不満		大変不満	
	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施	12月実施	3月実施
保護者	50%	67%	33%	33%	17%	0%	0%	0%	0%	0%
子ども	39%	33%	28%	47%	28%	20%	0%	0%	0%	0%

vi. 今後の課題

今後の課題は大きく2つあると考えられる。1つ目は学生の指導力の質の向上である。2つ目は施設、用具の充実である。

1つ目に関してだが、本教室に参加する学生は教員志望の学生であり、本教室を通して、いわゆる実践的指導力の向上に励んでいる。スポーツを教える際には、指導者には学習者の「できない」を「できる」へ、「できる」を「よりうまくできる」へ導く能力（促発能力）が必要になる。本教室に携わった頃と比べると、学生の指導力は徐々に向上していると思われる。たとえば、子どもをまとめること、動きのポイントを呈示すること、示範のしかた、練習メニューを計画することなど、改善されているように見受けられる。しかし、3月に実施されたアンケートの「運動能力向上の実感度」における子どもの回答欄の「ふつう」が40%であることを考えると、指導力のさらなる向上が図られる必要性が見出される。

2つ目であるが、「大学」という資源を考えると、現状では施設、用具の充実度が高いとは言いきれない。実際に、「施設の充実度」の項目における子どもの回答では「ふつう」（12月：22%、3月：33%）、「用具の充実度」の項目における保護者の回答でも「ふつう」（12月：25%）、子どもの回答でも「ふつう」（12月：17%、3月：20%）がある。おそらく、保護者、子ども共に、無意識に自身が通う小学校と比較し、その比較を通して「ふつう」と感じていると考えられる。したがって、小学校での体育・スポーツとの違いを鮮明にし、本教室での活動をより充実させるためには、施設の拡充、多種多様な用具の増加によってハード面の充実を図る必要があると考えられる。

アンケートを通して、本教室の課題が浮き彫りにされた。今後、これらの課題解決に努めることによって、本教室の質がさらに向上されることが期待される。

(2) 陸上教室

i. 教室の概要

本教室は、毎週日曜日に本学の陸上競技場と屋内走路において、新潟市北区内と近郊の小学校4年生から6年生を対象として実施している。指導者は、短距離走を中心に指導し、基本的な走り方を身に付けさせることを目標としている。参加児童は、小学校の運動会やマラソン大会で成果を発揮すること、新潟県小学生陸上大会に出場・入賞することなど目標としている。今年度は児童62名の参加があり、教員1名と学生のべ13名で指導に当たっている。

ii. 課題

本教室は開始から8年が経過しており、継続者が多いこと、毎回の出席率が高いことが特徴であり、参加児童、保護者の満足度は低くないものと考えられる。教室の質向上のため、児童および保護者アンケートを自由記述にて実施し、児童34件、保護者33件の回答を得た。実施者らで検討した結果、児童の76.5%、保護者の75.8%から肯定的な回答があった。一部で長距離走の実施、出場できる大会の増加を求める声などがみられた。

iii. 課題の解決方法

通常の教室に加えて、イベント要素のある特別教室を実施することで課題の解決に迫った。具体的には、①外部指導者を招いた特別教室、②学生が企画する特別教室、を企画した。

iv. 実施状況

(1) 外部指導者を招いた特別教室

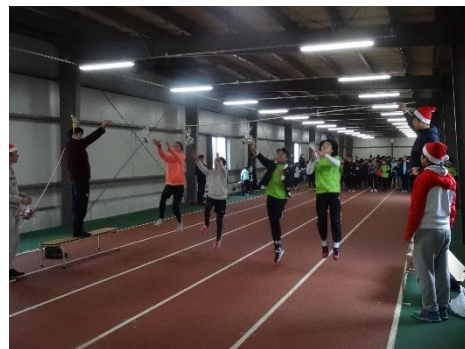
1月13日(日)と27日(日)にアルビレックスランニングクラブジュニア陸上スクールヘッドコーチ 足立原 和宏 氏をお招きし、長距離走の指導を中心として冬の特別教室を実施した。



冬の特別教室の実施状況

(2) 学生が企画する特別教室

12月8日(日)に学生コーチの企画によるゲームやレクリエーションを中心としたクリスマス特別教室を実施した。当日の学生コーチは、衣装を工夫して指導に当たり、楽しい雰囲気醸成に努めた。また、通常の教室よりもゲーム要素や友達との交流を増やした内容構成とした。さらに、年内の最終回であったことから、「ジャンピングプレゼントキャッチ」レースを行って締めくくった。以上のように、スポーツ教室と季節行事を結び付け、子供に特別な体験を届けることができた。



特別教室の実施状況

v. 効果の評価

それぞれの特別教室に参加した児童、観覧した保護者との会話から、おおむね参加者の満足は得られたと考えられる。

vi. 今後の課題

既存の陸上教室については、継続・出席状況、アンケート結果から、満足度は低くなかった。その上で、本事業の支援によって更なる質向上が図られた。残された課題は参加できる大会を増やすことである。今後は、陸上競技部が主催する学内記録会への出場機会を設けるなどして課題の解決とさらなる質の向上に努める。

4.2 スポーツ傷害予防フォーラムの実施

本学の特色であるリハビリテーション科学とスポーツ科学を組み合わせた、地域のスポーツ団体を対象としたスポーツ傷害予防に関するフォーラムとして「スポーツ傷害予防フェスタ in NUHW」を下記の通り開催した。

(1) 開催趣旨

人々が安全にスポーツを楽しみ、幸せな生涯を過ごすためには、傷害予防の推進は非常に重要である。本学が保有するスポーツ科学とリハビリテーション科学の知見を活かし、地域のスポーツ傷害予防を推進する活動の一環として、新潟県内のミニバスケットボール選手及び指導者、保護者に対して、スポーツ傷害予防の研修会を開催した。

(2) 日時

2019年2月2日（土）10：00～15：00

(3) 場所

新潟医療福祉大学 第2講義棟（Q棟）203講義室 及び 第3体育館

(4) 協力

新潟アルビレックスBB、新潟アルビレックスBBラビッツ
（参加者特典として試合のチケットを提供頂いた）

(5) 参加者

新潟県内のミニバスケットボールチームの指導者、保護者、選手 及び 他競技の指導者等
受講者：192名（指導者10名 保護者48名 小学生125名 本学学生17名 大学職員1名）
運営スタッフ：36名（講師2名 大学スタッフ8名 学生スタッフ26名）

※学生スタッフの内訳は理学療法学科 6名、男子バスケットボール部 10名、
女子バスケットボール部 10名

(6) 内容

第1部 講義「小学生の身体とミニバスケットボールのけが」

【講師】新潟医療福祉大学 健康スポーツ学科 教授 大森 豪 氏

普段の指導現場の中で起きやすい怪我の事例や小学生年代特有の身体の成長について講義を行った。保護者や指導者等の大人の方々にとっても、気付きや学びのある内容であった。子供達も一生懸命にメモ等を取っている姿が印象的であった。

第2部 実技講習：「傷害予防に効果的なストレッチング」

【講師】新潟医療福祉大学 理学療法学科 講師 菊元 孝則 氏

理学療法学科学生

実際に身体を使ってのストレッチング講習を実施した。指導現場でもすぐに使えるような内容で学生スタッフ達もマッサージベッドを持ち込み、その上で子供達にストレッチができる様、

工夫した。子供たちが普段何気なく行っているストレッチについて、講習を聞きながらどこが伸びているのか、なぜ必要なのかを意識できるように促した。

第3部 実技講習：「バスケットボールクリニック」

【講師】新潟医療福祉大学 男子バスケットボール部 監督 梅津 卓氏

女子バスケットボール部 監督 寒河江 功一氏

男子・女子バスケットボール部学生

本学の男女バスケットボール部の指導者及び部員の学生によるクリニックを行った。体育館狭しと子供達が笑顔で走り回り、普段とはまた違う雰囲気、練習メニューでプレーした。最後には男女に分かれ本学男女バスケットボール部の学生とミニゲームを行った。学生にも果敢に向かっていく積極性も垣間見えた。

(7) 実施の様子

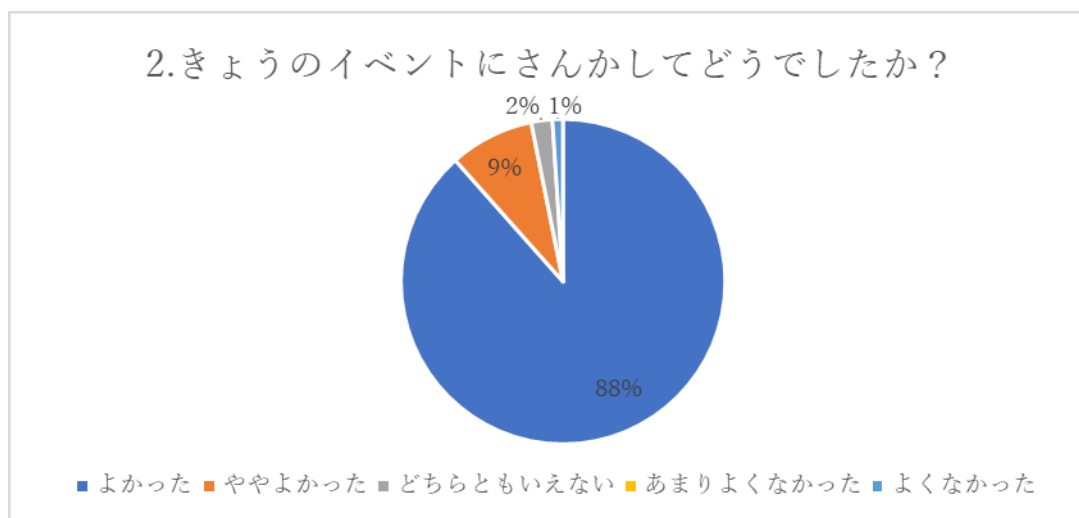


(8) 実施効果の検証

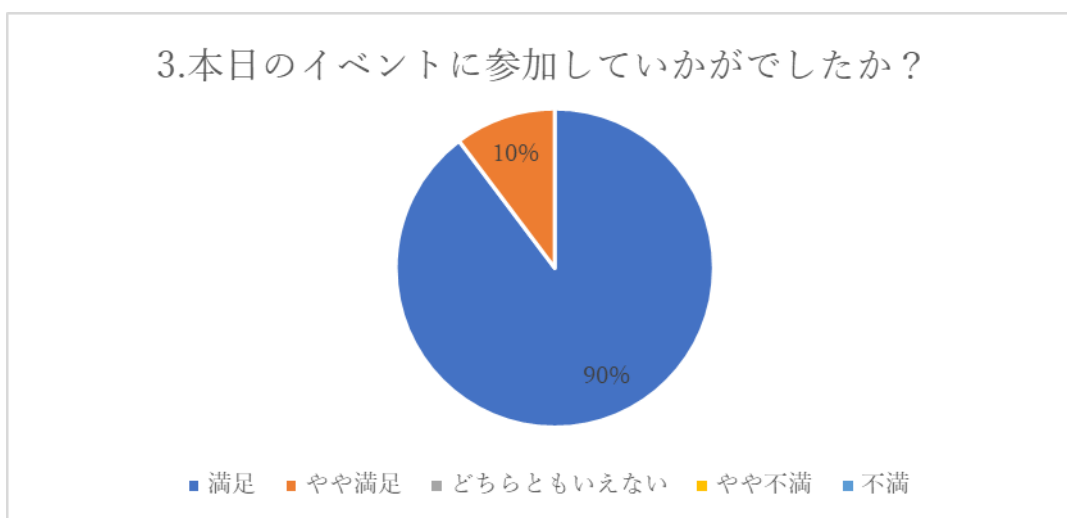
参加者に対してアンケートを実施し、実施効果の検証を行った。

選手である小学生とそれ以外の指導者・保護者・学生の2つに分けてアンケートを実施した。

まず、下図のように参加者の満足度について選手では97%、指導者・保護者・学生では100%と高い満足度を得ることができた。

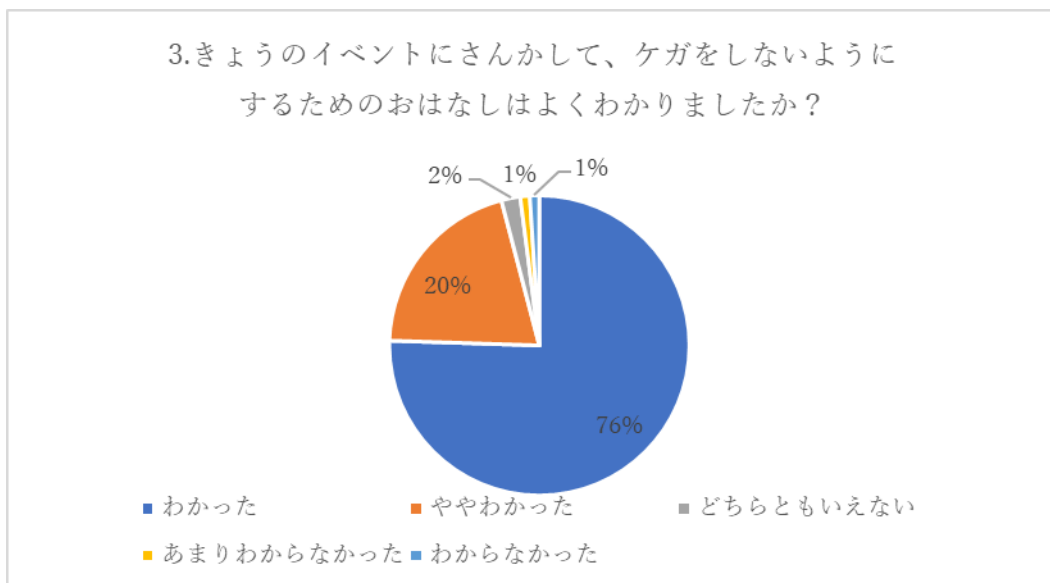


選手へのアンケート

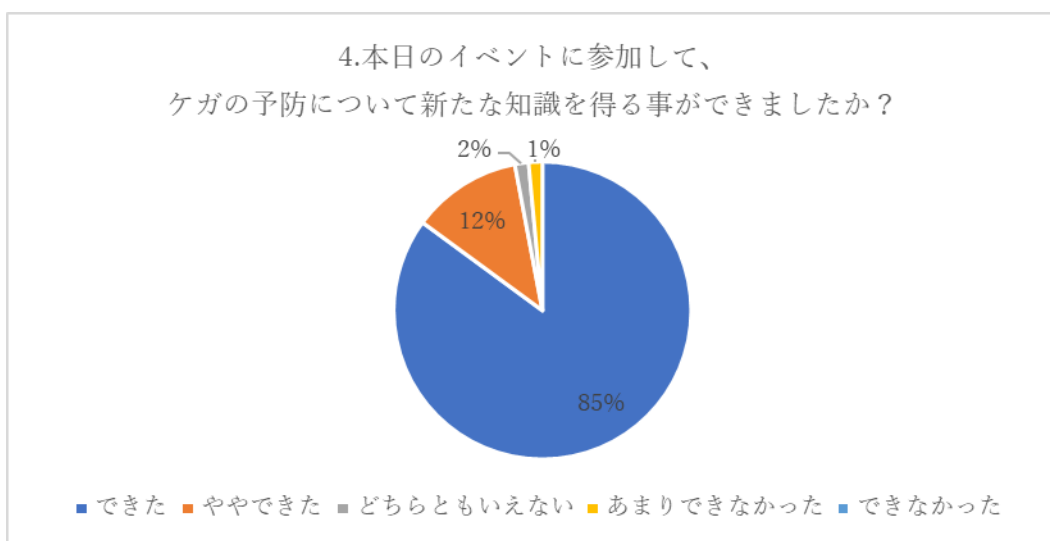


指導者・保護者・学生へのアンケート

また、ケガの予防に対して、新たな知識を得ることができたかについて、選手へは講義・実技の理解度、指導者・保護者・学生については知識の習得の有無について設問を行い、下図のようにそれぞれ、96%、97%と高い結果となった。

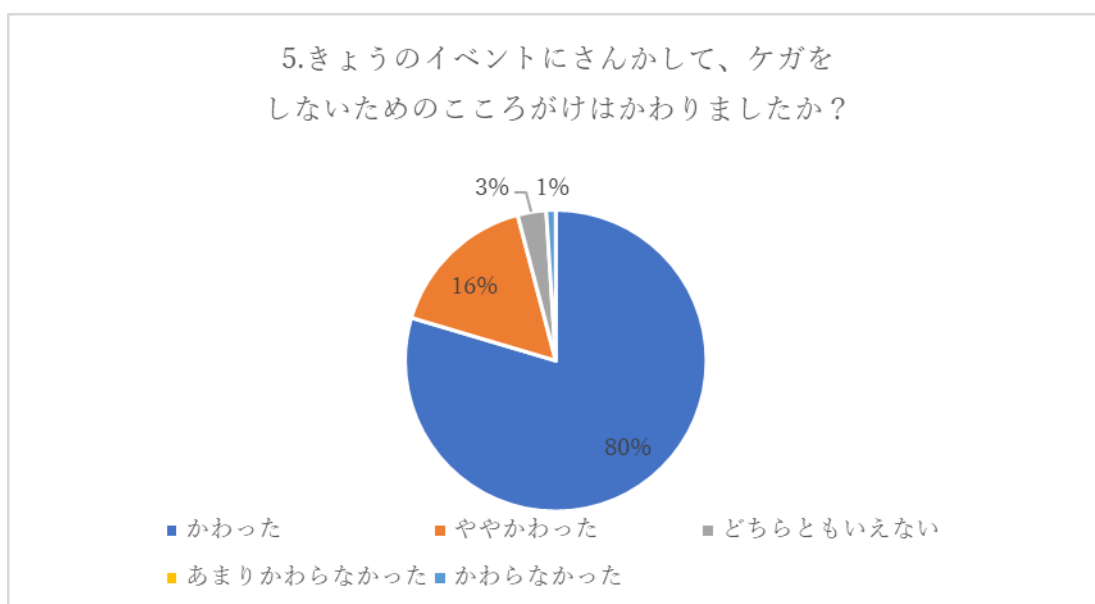
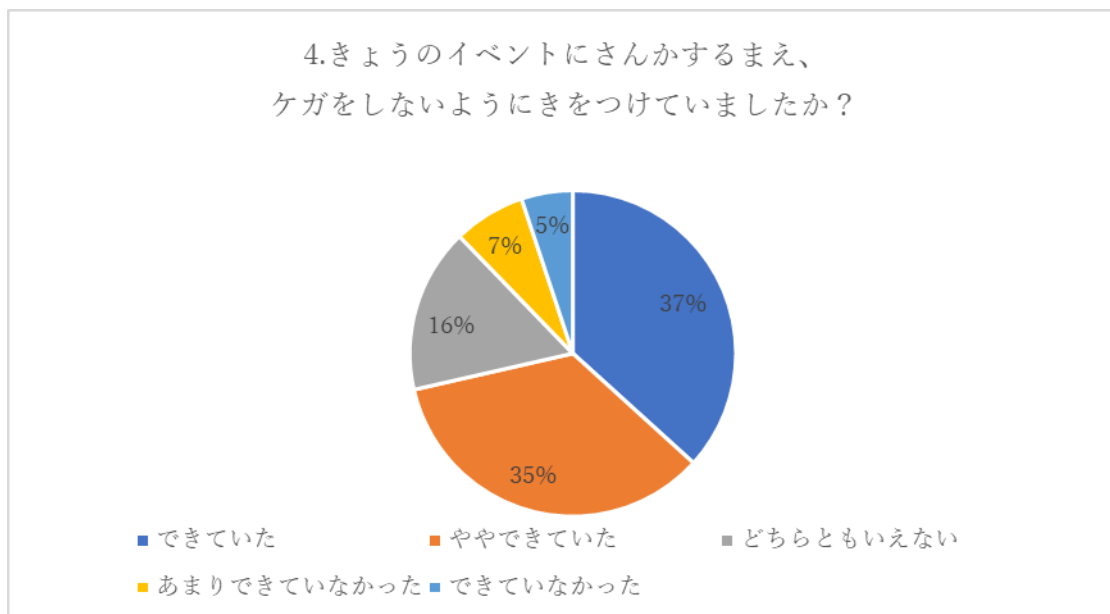


選手へのアンケート



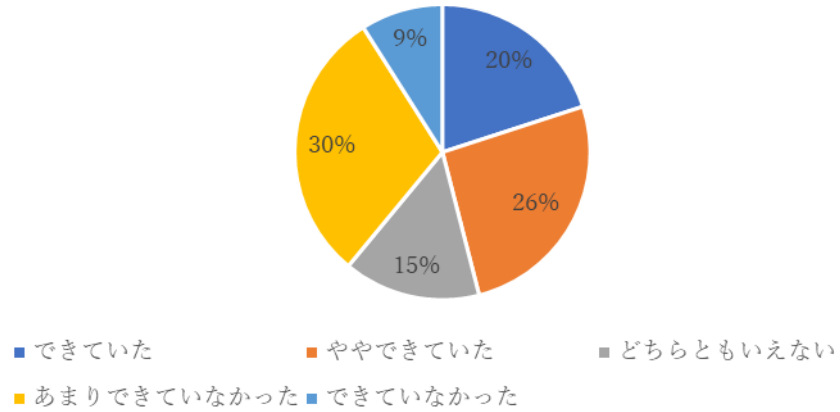
指導者・保護者・学生へのアンケート

事前の怪我の予防についての意識と、それが変わったかについて設問を行った。下図のように、参加前に意識できていた割合が選手では62%、指導者・保護者・学生では46%と決して高くなかったが、参加して意識が変わった割合は選手では96%、指導者・保護者・学生では95%となった。

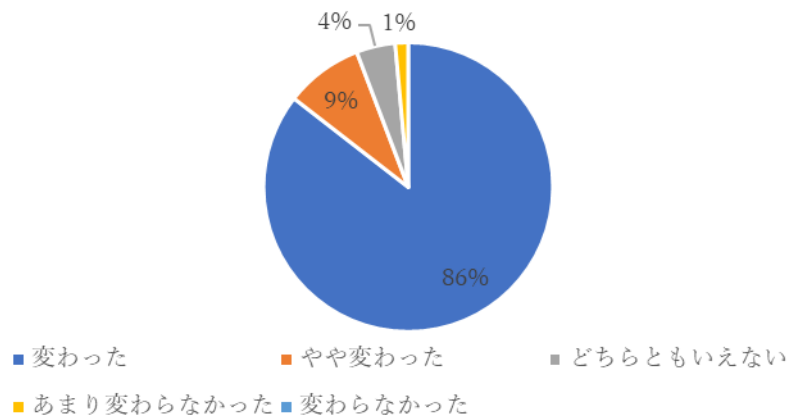


選手へのアンケート

5.本日のイベントに参加する前、
ケガの予防についてどのくらい意識できていましたか？



6.本日のイベントに参加して、
ケガの予防についての意識は変わりましたか？



指導者・保護者・学生へのアンケート

以上の結果から、スポーツ傷害予防フェスタ in NUHW では、参加者の満足度が高く、ケガの予防について新たな学びと意識付けができたと考えられる。

(9) 今後の課題

アンケートでは継続実施や他競技への展開を求める声も頂いており、今後も地域での傷害予防の推進に取り組んでいく。運営について、駐車場のアナウンスが伝わりにくかったとの指摘などがあり、次回の実施では改善に努めていく。

4.3 アルビレックスグループと連携した人材育成のさらなる推進

本学はプロクラブであるアルビレックスグループと連携し、インターンシップの実施やスポーツマネジメントの調査研究、経営者による講義、トレーニングマッチの実施、女子サッカー部員のアルビレックスレディースへの登録等の人材育成を行っている。

本事業において、アルビレックスグループとのさらなる連携による人材育成を推進する取り組みとして公開セミナー「アスリートと SNS」を下記の通り開催した。

(1) 開催趣旨

プロスポーツ選手や学生アスリートが Twitter や instagram を活用し情報発信することは、アスリート自身のパーソナルブランディングにとって重要な手段の一つとなっており、所属するチームや学校のブランディングにおいても同様といえる。しかしながら、SNS は個人のアカウントで運用するが故に、活用状況においては個人差が大きく、また所属団体によるサポート等組織的な取り組みが行われていないケースが多い状況である。SNS はファンやサポーターと選手が直接コミュニケーションを行い、絆を深める機会を提供する一方で炎上リスクも伴うため、適切な発信やコミュニケーションを行う上での正しい知識や考え方を身につける必要がある。そうした状況を踏まえ、学生としての SNS 活用も含め、選手の SNS の有効活用及び所属団体による選手への組織的な支援について学び、考える機会として本セミナーを実施した。

(2) 日時

2019 年 2 月 2 日 (土) 15 : 00 ~ 17 : 00

(3) 場所

新潟医療福祉大学 第 2 講義棟 (Q 棟) 202 講義室

(4) 協力

アルビレックス新潟

(5) 参加者

新潟医療福祉大学の運動部の学生及び教職員、新潟県内のスポーツ関係者

受講者 : 67 名

運営スタッフ : 9 名 (講師 3 名 大学スタッフ 5 名 学生 1 名)

(6) 内容

第 1 部 講演「スポーツにおけるインターネット・デジタル戦略」

【講師】株式会社 J リーグデジタル コミュニケーション戦略部 部長 杉本 渉 氏

J リーグのデジタル戦略を担当されている杉本氏からは、データに基づいてインターネットの重要性について再提示を頂き、その上で J リーグが考えているデジタル戦略について講演頂いた。

第2部 講演「SNS活用の注意点及びSNSの活用事例」

【講師】株式会社トレンシス クリエイティブディレクター 兼

公益財団法人日本オリンピック委員会 選手強化本部 インテグリティ教育ディレクター
上田 大介 氏

オリンピックやプロスポーツ選手などのSNSに関する研修を数多く担当されている上田氏からは、アスリートに関するSNSでのトラブルとその対策、SNSを活用する上でのポイントを講演頂いた。

第3部 パネルディスカッション「個人と組織のSNS活用の違いと融合」

【講師】株式会社Jリーグデジタル コミュニケーション戦略部 部長 杉本 渉 氏

株式会社トレンシス クリエイティブディレクター 兼

公益財団法人日本オリンピック委員会 選手強化本部 インテグリティ教育ディレクター
上田 大介 氏

株式会社アルビレックス新潟 代表取締役社長 是永 大輔 氏

パネルディスカッションでは、まずアルビレックス新潟の是永社長から、アルビレックス新潟や是永社長自身でのSNSの活用事例について紹介頂いた。その後杉本氏、上田氏と共にプロクラブ、大学チームのそれぞれで個人やチームのSNSをどのように使っていくかを議論した。本学野球部の学生も議論に参加し、学生視点でのSNSの活用に関する質問等、講師と話し合った。

(7) 実施の様子



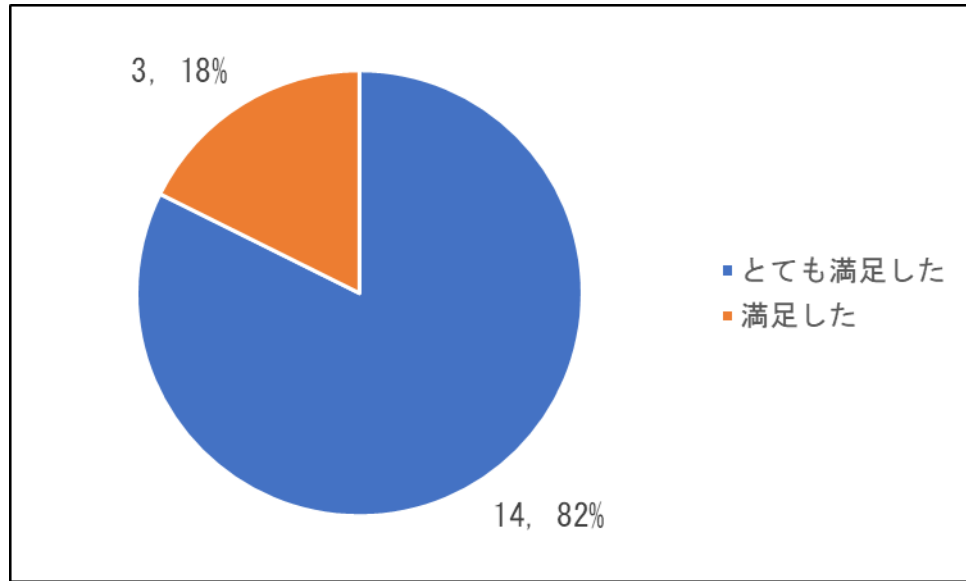


(8) 実施効果の検証

参加者に対してアンケートを行い、17名から回答を得た。

アンケートから評価すると、参加者の満足および新たな学びを提供できたセミナーであったと考えられる。また、アルビレックスグループと連携したセミナーについて今後も期待する声が多く、ニーズがある取組であると考えられる。

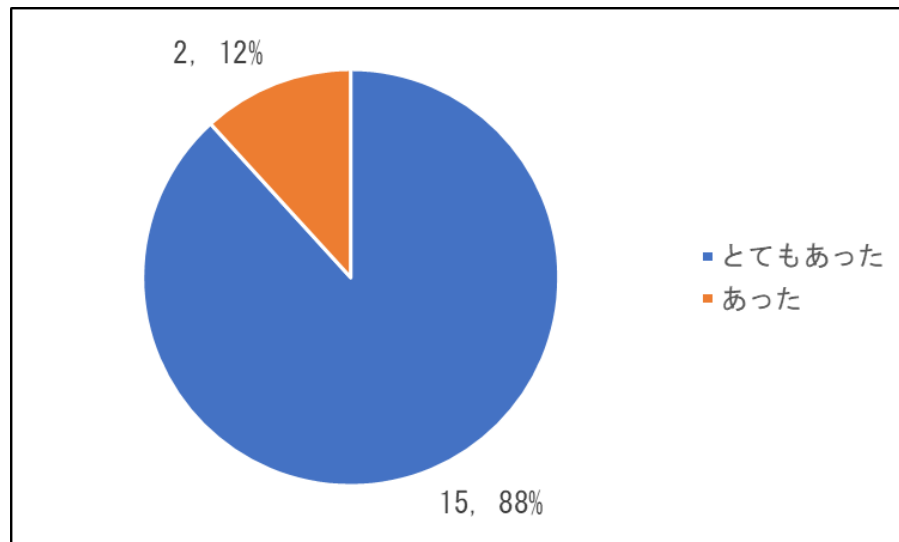
まず、セミナーの満足度について、5段階評価で評価を得たところ、下図の通り回答者全員から満足との回答を得た。



設問：本日のセミナーに参加していかがでしたか？

自由記述で満足の理由についても回答を頂き、「活用の仕方を学ぶ機会は今までなかったため、携帯1つで情報が拡散されてしまう恐怖をしっかりと持ち、自分の投稿に責任を持ちたいと感じた。」「スポーツ選手に本当に聞かせたい内容があった。」という声が挙げられた。

また、セミナーに参加して新たな学びがあったかどうかについて、5段階評価で評価を得たところ、下図の通り回答者全員から学びがあったとの回答を得た。

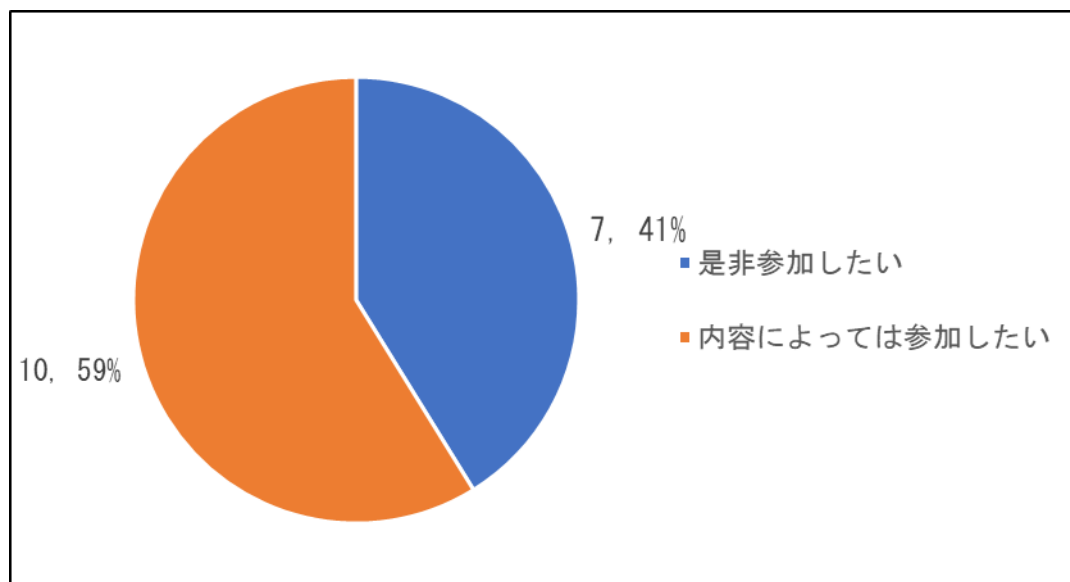


設問：本日のセミナーに参加して SNS の活用について新たな学びはありましたか？

自由記述で満足の理由についても回答を頂き、「SNS が既にメディア媒体の半数以上のシェアになっていることを知り、その対策や導入に対し本格的に進める必要があると強く感じた。」「自分が想像していたよりもはるかに SNS は我々の生活や人生を左右するものなのではないかと、考えさせられる会でした。」「周りのメディアと自分のメディアの活用があることを知りました。

自分のメディアだけに注意を払うのではなく、周りのメディアに対しても注意を払いたいです。」という声が挙げられた。

また、アルビレックスグループと連携したセミナーについて今後参加したいかどうかについて、下図の通り、参加したいという声が多かった。



設問：今後、再びアルビレックスグループと連携したセミナーがあった場合に参加したいと思いますか？

以上のように、参加者から高い評価を受けたセミナーであったが、セミナーの改善点としては、パネルディスカッションの進行改善やセミナーの時間設定についての要望が回答者から挙げられた。今後の取組では頂いた意見を元に改善に努め、さらなる人材育成を推進する。

(9) 今後の課題

今後も学生及び地域からのニーズを把握しながらアルビレックスグループと連携した人材育成の推進の取り組みを継続していく。また、セミナーで指摘のあった、パネルディスカッションの進行や時間設定について改善を重ね、受講者の満足と学びの深化に繋がるセミナー運営に取り組んでいく。

4.4 障害者スポーツのさらなる振興

本事業では「障害者陸上教室」及び「車いすバスケットボールの振興」について既存の取り組みから課題の抽出及び改善を図ることとした。

(1) 障害者陸上教室

i. 教室の概要

本教室は、月に一度のペースで本学陸上競技場（屋内走路練習場）において、四肢切断者を対象として実施している。走行で使用する義足パーツは高価であり、義足使用者にとってのランニングや短距離走は、気軽に楽しめるスポーツではない。本教室では、義足メーカーの協力のもと走行専用の義足足部を無償で貸し出ししてランニング教室を実施している。指導者は、義足走行獲得の指導と義足の調整を行い、学生は義肢装具士指導のもと、パーツの付け替えや義足の調整、走者の介助を行っている。参加者は、新潟県障害者スポーツ大会に出場することを目標としており、走行練習の他、立ち幅跳びやソフトボール投げの練習も実施している。

現在の参加者は大腿切断者4名であり、教員3～4名、義肢装具士3名、理学療法士2名、学生15名程度で指導およびフォローをしている。



ii. 課題

本教室によって障害者スポーツのさらなる振興を図る上で、陸上競技を志す障害者アスリートの発掘と育成を推進していくことが重要であり、課題となっている。

また、走行用義足の専用パーツや義足取付け用ソールは消耗品である他、通常歩行以上に大きな力が義足本体に加わるため、破損することも少なくない。本教室で使用している消耗パーツは、義肢装具自立支援学科の授業用に使用しているものと共用しながらやりくりを行っているため、授業に支障がでたり、適正な時期での交換ができず参加者の安全面の確保に不安が残る場合がある。

iii. 課題の解決方法

全国障害者スポーツ大会への参加と視察、他の障害者陸上クラブのコーチに本教室に参加いただき指導法や育成候補選手等の情報収集および情報交換を実施する。

また、義肢装具自立支援学科の授業への支障の解消や参加者の安全面の確保のため、本教室専用の消耗パーツを整備し、対応年数および破損が考えられるパーツの交換や、走者の安全面を考慮した義足調整を実施する。

iv. 実施状況

① 全国障害者スポーツ大会への参加と視察

実施日時：2018年10月12日（金）～10月15日（月）

場所：9.98 スタジアム（福井県営陸上競技場）

参加者：本活動から選手2名と義肢装具士1名

報告：本活動に参加している大腿切断者が「第18回全国障害者スポーツ大会（福井）」に新潟市代表として選出された。義肢装具士1名が選手2名のスポーツ義足のメンテナンス、試合観戦を行った。その他、選手育成のため候補選手などの視察を行った。今後も引き続き本活動を推進し、継続して練習会を実施する。さらに、パラアスリート育成のため、各競技会に出向き候補選手の視察を行う。



全国障害者スポーツ大会への参加状況

② 外部指導者との情報交換会の実施

実施日時：2018年11月30日（金）

場所：新潟医療福祉大学 屋内走路

講師：Ibis Running Club コーチ 村木 和紀 氏

報告：新潟市障害者陸上競技のコーチをされている村木様より、障害者陸上競技におけるストレッチや準備体操の方法、新潟県障害者スポーツ大会陸上競技や全国障害者スポーツ大会陸上に関する選手の情報や競技ルール等をご教授頂いた。

③ 義足消耗パーツの整備

実施日時：毎回の教室（2018年9月28日（金）、10月21日（日）、11月30日（金）、12月21日（金）、1月25日（金）、2月15日（金）、3月22日（金））

場所：新潟医療福祉大学 屋内走路

報告：本教室専用の消耗パーツを整備し、対応年数および破損が考えられるパーツの交換や、走者の安全面を考慮した義足調整を実施した。



義足消耗パーツの整備状況

v. 効果の評価

① 全国障害者スポーツ大会への参加と視察

育成候補選手の選定や育成環境整備についての示唆を得られた。継続してさらなる情報収集に努める。

② 外部指導者との情報交換会の実施

現在行っているストレッチのより効果的な方法と注意点を得られ、走行フォームや傷害予防に役立った。また、今後の選手発掘戦略についての示唆を得られた。

③ 義足消耗パーツの整備

教室を実施している時間帯においても破損が考えられるパーツを迅速に交換することが可能となり、練習時間と安全面の確保、走者のレベル変化に合わせた義足調整が可能となった。結果的に参加者への安心感を得ることができた。

vi. 今後の課題

本教室を開始して約1年半が経過するが、現在の参加者は大腿義足使用者4名である。今後の発展のために、より多くの義肢使用者の参加を促す方法を検討する必要がある。加えて、選手の発掘と育成方法についてさらなる検討を進める必要がある。特に、義足走行獲得のための指導法が確立していないので、今後は義肢装具メーカー主催のランニングクリニックに参加し情報収集を行い、指導者の育成に努める。

(2) 車いすバスケットボールの振興

i. 既存の取組の概要

本学では全学生の必修科目である「スポーツ・健康」で車いすバスケットボールを全学生が経験し、障害者スポーツへの理解向上を図っている。そこから車いすバスケットボールサークル「NUHW GRIFFINS WBC」が結成され、学生中心に学内での車いすバスケットボールの普及を行っている。また、地域の車いすバスケットボールチーム「新潟 WBC」と合同で練習を開催している。

ii. 課題

車いすバスケットボールの振興にあたって、学内では学生が「スポーツ・健康」の履修後に車いすバスケットボールと関わる機会がほとんど無くなってしまふこと、学外では車いすバスケットボールに触れ合う機会が少ないということが課題として挙げられる。

また、障害者スポーツの振興のためには、基礎的理解に加え専門性の高い学びが必要であるため、学生スタッフの知識技術向上についても課題として挙げられる。

iii. 課題の解決方法

車いすバスケットボールの振興に当たって、継続的に学生や地域の方々から車いすバスケットボールに関わる機会を創出していくことが、必要と考えられる。本事業では学園祭のイベントとして学内および地域住民への車いすバスケットボール体験会を開催し、車いすバスケットボールの普及・振興を行った。

また、学生スタッフの知識技術向上を図るために、U23 日本代表アシスタントコーチによる講習会を行った。

iv. 実施状況

① 車いすバスケットボール体験会

実施日時：2018年10月7日（日）

場所：新潟医療福祉大学 第3体育館

概要：車いす20台を用意し、学生スタッフを中心に参加者へ車いすの操作から車いすバスケットボールの技術やルールを指導しながら、体験する。

参加者数：87名

報告：学園祭のイベントとして車いすバスケットボール大会「NUHW WBC CUP」と同時に車いすバスケットボールの体験コーナーを設置し、地域住民や来場者、本学生などが体験した。学生スタッフの指導の下、参加者は3歳からの幼児をはじめ、中・高校生、一般の方まで幅広い年齢であった。操作によって車いすが自由に動くことを楽しんでいる様子で、車いすからのゴールの高さに驚きながら必死にシュートをトライしている姿が印象的であった。夢中になり20分から30分やり続ける参加者がほとんどであった。また、やりたいという声が多かったので継続実施について検討していきたい。



車いすバスケットボール体験会の実施状況

② 車いすバスケットボール講習会

実施日時：2019年2月14日（木）、2月21日（木）、2月28日（木）

場所：新潟医療福祉大学 第1体育館

講師：新潟WBC 肥田野 篤史 氏（車いすバスケットボール日本代表U-23アシスタントコーチ）

報告：車いすバスケットボールに必要な基本技術（チェアスキル）、ゲームにおける基本戦術（バックピックロール）の指導を受け、競技の高度化について学生スタッフの知識技術向上を図った。

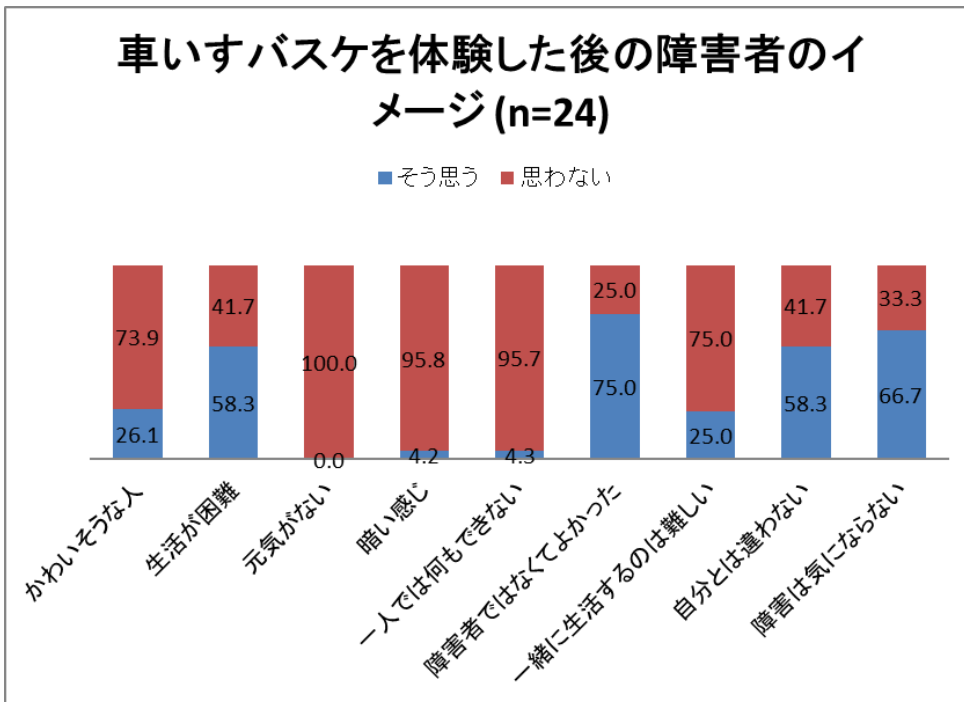
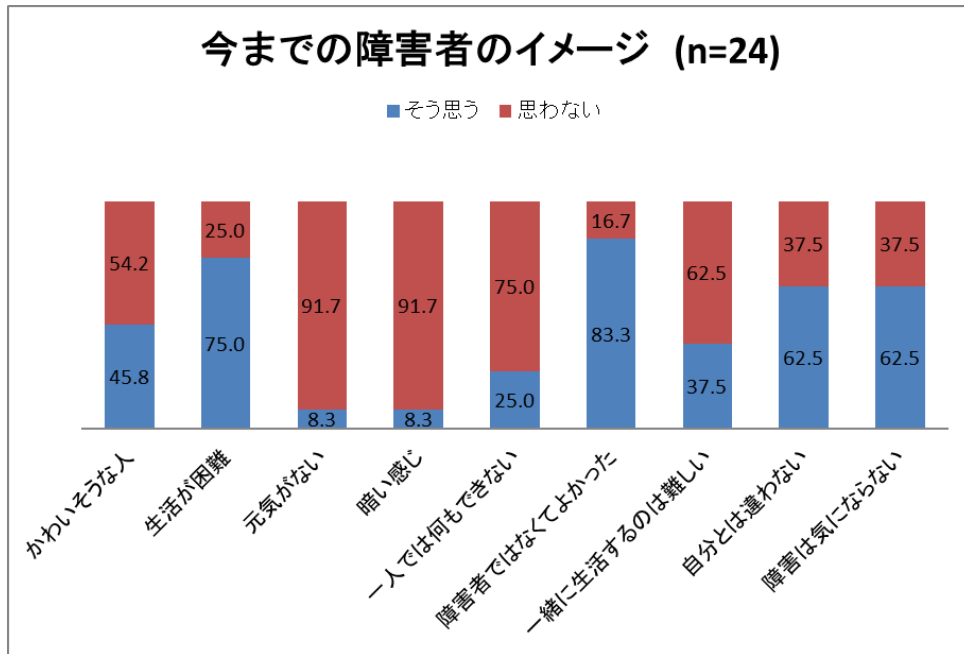


車いすバスケットボール講習会の実施状況

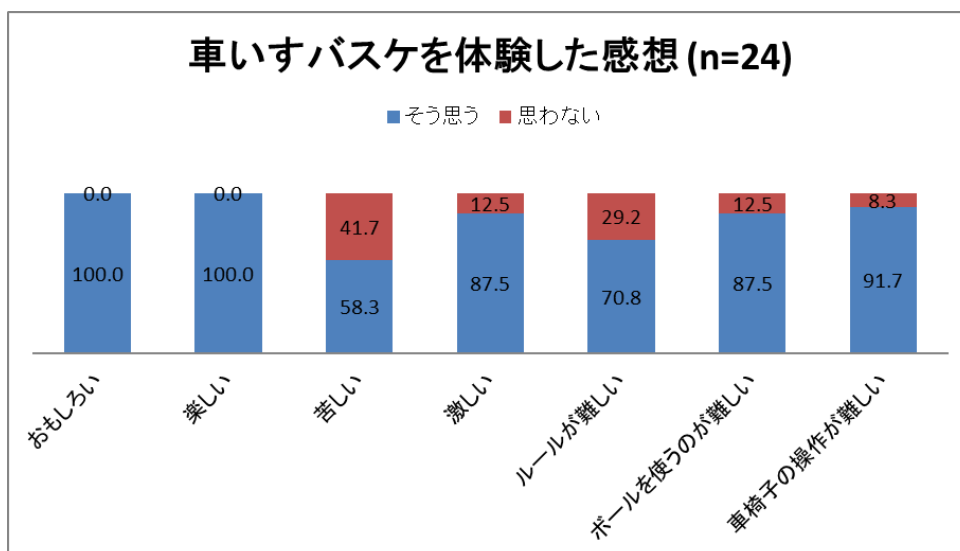
v. 効果の評価

① 車いすバスケットボール体験会

参加者に対し、「障害者へのイメージ」についてアンケートを行い、参加者のうち24人から回答を得、下図のような結果を得た。車いすバスケットボールを体験することで参加者の中で障害者に対するネガティブなイメージが全体的に減少したことがわかった。車いすバスケットボールを体験することで障害者への理解向上に一定の効果があったと考えられる。



また、車いすバスケットボールを体験した感想は下図のようになった。「おもしろい」「楽しい」という車いすバスケットボールに対する良い印象を受けた参加者が多かった。また、「車椅子の操作が難しい」という感想が多く、車いすバスケットボールの競技性に関する理解の向上も図れたと考えられる。



② 車いすバスケットボール講習会

U23 代表コーチ、U23 代表選手等や車いすバスケットボール選手と共同練習し、学生スタッフや車いすバスケットボールサークルの知識技術向上が図ることができたため、今後の車いすバスケットボールの振興が促進された。

vi. 今後の課題

引き続き大学内での周知や普及に努め、カレッジスポーツとしての「車いすバスケットボール」を確立できるように取り組んでいく。また、近隣地域から次年度のパラリンピック教育の協力要請が来ており、引き続き、共生社会の一助となるよう普及活動を進める。

5 まとめ

5.1 実施した事業

本事業では、以下の3項目について取り組みを行った。

①スポーツ分野の統括業務の実施

(1) 本学スポーツのブランド力向上に向けた施策立案

情報集約・発信体制の整備を行い、本学スポーツの発信力の強化を行った。期間における情報発信の実績で評価を行った。

具体的には強化指定クラブおよび日本代表選手の大会情報の把握及び発信、学内掲示の充実、イベントでの強化指定クラブブースでの学外発信といった取り組みを行った。

(2) コンプライアンス遵守、安全対策

強化指定クラブの活動費の管理方法の強化施策を立案した。また、安全対策の強化として傷害保険加入状況の調査と施策立案を行った。

具体的には、大学から各部に支給される活動費だけでなく、部員から徴収した経費についても管理を強化する体制とするため、各部からスポーツ振興室に報告を行う体制とした。また、各部から部員及び保護者に決算及び予算について報告を行う体制として透明性の向上を図った。また、安全対策の強化として、傷害保険加入状況の調査を行い、今後の方向性について検討を行った。

②大学スポーツアドミニストレーターの配置

(1) 本学スポーツのブランド力向上に向けた施策立案

「①スポーツ分野の統括業務の実施」と同様。

(2) 大学外との連携強化策立案

地域に公開したイベントを開催することによって、本学の特色を地域に伝えるとともに、参加者との対話やアンケートを通じてニーズを把握していくことにより、大学外との連携強化を図ることを立案し、今回「③大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施」で行ったイベントでのアンケートにより有効性の確認を行った。

③大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施

本学のスポーツの特色である、地域との連携、スポーツ科学とリハビリテーション科学の融合、障害者スポーツの取り組み、アルビレックスグループとの連携をさらに推進するために、今回以下の4事業を行った。

(1) スポーツ教室の質のさらなる向上

本事業では既存のスポーツ教室の課題を抽出し、改善に繋げてスポーツ教室の質向上を図った。

子どもの運動能力向上教室では、「指導の充実」を課題とし、指導者として携わる学生の質向上に取り組んだ。毎回の教室の後に担当教員との振り返りの時間を設け、改善点を話し合い次回の指導に活かした。参加した子供及び保護者に対してアンケートを実施し、施策の評価を

行った。また、指導する学生スタッフのさらなる指導力向上と施設設備面の充実が今後の課題となった。

陸上教室では、参加児童及び保護者に対してアンケートを取り、課題を検討した。その結果、長距離走や出場できる大会の増加などを求める声が見られた。本事業ではイベント要素のある特別教室を開催することで課題の解決を図った。具体的には外部指導者を招いた特別教室、学生が企画する特別教室を実施した。それぞれの特別教室に参加した児童、観覧した保護者との会話から、おおむね参加者の満足は得られたと考えられる。今後の課題として、学内記録会など子供が参加できる大会を増やしていくことを検討していく。

(2) スポーツ傷害予防フォーラムの実施

本学の特色であるリハビリテーション科学とスポーツ科学を組み合わせた、地域のスポーツ団体を対象としたスポーツ傷害予防に関するフォーラム「スポーツ傷害予防フェスタ in NUHW」を開催した。

地域のミニバスケットボールチームを対象とし、選手、指導者、保護者に対して傷害予防に関する講義・実技とバスケットボールクリニックを行った。

参加者アンケートによって評価を行い、参加者の満足度が高く、参加者がケガの予防について新たな学びを得、ケガの予防に対する意識が変わったとの結果となった。継続実施や他競技への展開を求める声も頂いており、今後も地域での傷害予防の推進に取り組んでいく。運営について、駐車場のアナウンスが伝わりにくかったとの指摘などがあり、次回の実施では改善に努めていく。

(3) アルビレックスグループと連携した人材育成のさらなる推進

本事業において、アルビレックスグループとのさらなる連携による人材育成を推進する取り組みとして公開セミナー「アスリートと SNS」を開催した。

プロスポーツリーグのデジタル戦略の担当者、トップアスリートに対する SNS に関する研修を数多く担当されている専門家、プロスポーツクラブの経営者を講師として招き、アスリートが SNS を活用していく上で必要な知識や、大学アスリートとしての SNS との向き合い方について学びを深めた。

参加者にアンケートを実施し、効果の検証を行った結果、満足度が高く、新たな学びがあったとの回答が多い結果となり、狙っていた効果はある程度達成できたと考えられる。

(4) 障害者スポーツのさらなる振興

本事業では既存の取り組みの課題を抽出し、改善を図り、障害者スポーツのさらなる振興を目指した。

障害者陸上教室では、「陸上競技を志す障害者アスリートの発掘と育成の推進」、「参加者の安全面の確保」を課題とし、改善策を立案・実施した。具体的には①全国障害者スポーツ大会への参加と視察、②外部指導者との情報交換会の実施、③義足消耗パーツの整備、を行った。ま

た、行った施策の効果及び今後の課題について検討を行った。特に義足走行獲得のための指導法の確立に課題が残る結果となった。

車いすバスケットボールの振興では学生が車いすバスケットボールの実技を含む科目である「スポーツ・健康」の履修後に車いすバスケットボールと関わる機会がほとんど無くなってしまふこと、学外では車いすバスケットボールに触れ合う機会が少ないということが課題として挙げられた。また、障害者スポーツの振興のためには、基礎的理解に加え専門性の高い学びが必要であるため、学生スタッフの知識技術向上についても課題として挙げられた。課題の解決として、本事業では「学内および地域住民への車いすバスケットボール体験会」と「学生スタッフに対する U23 日本代表アシスタントコーチによる講習会」を行った。体験会参加者に対してアンケートを行い、得られた回答からは車いすバスケットボールの体験が障害者への理解促進に対して一定の効果があったと考えられた。また、講習会によって学生スタッフの知識技術の向上が図られた。今後も引き続き活動の継続と周知を行っていくと共に、近隣自治体とパラリンピック教育での連携を検討していく。

5.2 総括

前述のように、本学は保健・医療・福祉・スポーツの総合大学として、対象者のQOL (Quality of Life) 向上を考え、QOL 向上のため支援を実践する人材 (QOL サポーター) の育成を教育の基本理念としている。また、本学は地域のスポーツ振興や人材育成に寄与するためのスポーツ資源として、教員の研究成果、運動部、スポーツ施設、健康・スポーツを実践的に学ぶ学生等の資源を保有している。

本事業を通して、スポーツアドミニストレーターを中心とした組織体制の整備を進め、本学の特色である地域との連携、スポーツ科学とリハビリテーション科学の融合、障害者スポーツの取り組み、アルビレックスグループとの連携について、さらに推進できたと考えられる。また、陸上教室ではアルビレックスグループとの連携も含めた取り組みを行ったり、スポーツ傷害予防フェスタ in NUHW では地域との連携も含めて実施したりと、前述の特色を組み合わせる事業に発展させることができた。

今回の本学の事業では、スポーツの持つ、地域の人を集めたり、話題となる力を活かして、大学の特色と地域のニーズを連携させることにより、各大学それぞれが地域と共に発展する一つのモデルを提示できたのではないかと考えられる。

本学は今後も独自の特色を発揮しながら大学スポーツ全体の振興と発展に貢献できるよう、取り組みを継続していく。